

千里ニュータウン、日本万国博覧会、そして世界都市吹田へ

—市民の手による回顧展が大成功を収める—

村上 正(正会員 元吹田市特別展実行委員会市民委員)

吹田市と千里ニュータウン

吹田市は大阪市の北東に位置し、古くから交通の要所として重視され、後期難波の宮の瓦を製造し、平安時代まで瓦の生産をしていた。1923(大正12)年にはJRの吹田操車場が設置され、東洋一の規模を誇っていた。その後1940年(昭和15)年に1町3村の合併により吹田市が誕生するまでは、吹田は大阪市の都市計画である大阪都市計画区域に含まれ、吹田市は大都市大阪の郊外地でしかなかった。

しかし1957(昭和32)年に計画、事業が実施され、1962(昭和37)年にまちびらきした千里ニュータウンの誕生と、1970(昭和45)年に開催された日本万国博覧会により、吹田市の地位は大きく変わり、世界都市吹田へと変貌していく。

千里ニュータウンは1957(昭和32)年頃から当時の日本住宅公団

により計画が立案され、それを大阪府が受け継ぎ、新住宅市街地開発法による開発の第1号に指定され、わが国最初の大規模ニュータウンとなった。そこでは土木学会と日本建築学会と日本造園学会が初めて本心に協力し合う体制が作り上げられ、世界に誇るニュータウンが建設された。そこには従来とはまったく異なる新しい生活があった。当時新しく考えられた1小学校区を1万人としたモジュールの近隣住区制度、来るべき自動車社会に対応した歩行者分離道路や住区内に車を侵入させないようにした

クルトザック方式、斬新なデザイン
の学校や近隣センターなど、意欲的な考えにあふれる「実験都市」が誕生した。千里ニュータウンは環境や景観について非常に配慮された設計になつており、現在も観光客の訪れるような名所が多くつくられた(写真1は千里中央から万博会場を望む現状であり、写真2は秋に色づ



写真1 千里中央から万博会場を望む最近の風景

千里ニュータウン、日本万国博覧会、そして世界都市吹田へ—市民の手による回顧展が大成功を収める—

くアメリカ風の並木道)。40年前にこれを設計した土木技術者や造園技術者の才能に、今さらながら驚嘆せざるを得ない。

市民の手になる 千里ニュータウン展

2006(平成18)年4月22日から6月4日まで、吹田市立博物館で市民の手による「千里ニュータウン展ひと・まち・くらし」が開催された。実行委員会の市民委員は市民の中から白藤・他薦で45名が吹田市教育委員会により任命された。そしてこれらの人びとはすべてボランティアで参加した。会期中44日間の来訪者は2万人以上参加した。これは、博物館の1年間の入場者数をはるかに上まわる数であった。これは、千里ニュータウン住民やその地域住民が本場にニュータウンが住みよいまちであるという実感をもっており、市民が自分たちの手で回顧展をやるのだという意欲が結集したものと考えられ、この成果は日本各地からも市民の手による展示を吹田方式という評価を受けるほどのものとなった。

展示はニュータウンの計画概要と実施に至る経過を示す図面と、当時の生活を示すいろいろな生活用

具や写真などを展示した。特に注目を集めた展示品は軽三輪車の「ミゼット号」(写真4)と「ほくさんバスオール」であった。ミゼット号は千里ニュータウンでも引越しや荷物の配達に大活躍したもので、市民の一人が大切に保存していたものを展示してもらった。バスオールについては、千里ニュータウンの開発当初、大阪府営住宅約1万戸にはお風呂がなく、近隣センターの銭湯などを使用せざるを得なかったため、その不便さを解消するために、大阪府の許可を得て開発・販売された簡易型ユニットバスで、住民に大ヒットしたものであった。

イベントは講演会、おでかけイベント「千里再発見」は現在千里ニュータウンで名所になっているところを巡るコースを歩くもの、食のまつり、音楽などお楽しみ催事、そのほかゴールデンウィークの参加イベントとして千里の竹林をまわる千里竹の会による竹細工教室や粘土・紙細工教室なども実施した。これらは、すべて市民の多様な発想によるものであり、また日常実践されている活動の一環でもあった。

講演会とそれに伴う討論会は千里ニュータウン建設の意義、建設の苦勞談、そして千里ニュータウンの将



写真3 博物館館長によるニュータウン誕生当時の説明(提供:岡崎市民委員)



写真2 いまも美しい千里ニュータウンのアメリカ風の並木



写真4 千里ニュータウンのオープン当時活躍したミゼット号(個人所有)

来を語る重要な行事であった。大阪大学副学長の鷺田清一氏（現大阪大学学長）の講演に始まり、大阪人間科学大学教授 片寄俊秀氏の「千里ニュータウンの開発理念と花鳥風月のまちづくり」は過去の経験に基づく苦勞談と開発の理念について、大阪大学名誉教授 大久保昌一氏ほか5名による「千里ニュータウンの過去・現在・未来」と題する講演とシンポジウムで過去の開発の理念から今後のニュータウンのあり方についての再設計の方向などの議論、近畿大学教授 久隆弘氏による新しい住民参加によるまちづくりについての講演など、非常に意義あるものであった。

これらすべてが市民委員の発想



写真5 「わたしと万博」展示会場入り口の表示と万博のキー（提供：吹田市立博物館）

と委員自身の働きでなされたものである。

日本万博回顧展

日本万国博覧会が1970（昭和45）年に大阪府吹田市で開催されて、大成功を収めたことは記憶に新しい。しかしこの事業の発案者や、なされた建設工事、そして、その関連事業についての記録は、あまり残されていない。

この万博のために、日本中の建築家が結集し、多くの土木技術者や造園技術者も参画してこの大事業をなしたのである。万博を実施するための閣議決定が1967（昭和42）年になされたが、そのときの全体事業費が822.6億円



写真6 万博展に展示された「ウルトラソニックバス 一人間洗濯機」（提供：三洋電機（株））

で、そのうち万博関連事業費として計上されたのが650.2億円であり、その内容は道路、鉄道、港湾、空港整備であった。

吹田市民は千里ニュータウン展の成功を受けて、2007（平成19）年10月20日から12月2日まで「'07 EXPO '70 わたしと万博」を同じく吹田市立博物館で市民の手によって開催した。

展示は、万国博覧会を回顧しての写真を主に展示した。写真5はそのときの万博のキーである。当時のコンパニオンをされた方が委員におられたので、そのときの制服などの展示も行った。また万博のシンボルであった太陽の塔の作者である岡本太郎氏について、特にその芸術

の根源にあったものの解説などを展示した。また当時最新の技術を駆使したものとして、写真6の三洋電機の「ウルトラソニックバス（人間洗濯機）」を展示してもらい、講演会にも当時最新の技術であった電気器具の解説などをしてもらった。市民フォーラムとしては「わたしと万博」と題して、万博にかかわった人びとの大集合をお願いして37年前の万博の回顧談をしてもらった。講演会については、大阪人間科学大学教授の片寄俊秀氏に「EXP O'70と大阪のまちづくり戦略を振り返って」と題して講演をしてもらい、さらに元大阪芸術大学教授の中東達男氏に「お祭り広場の大屋根を造る」と題して、あの大屋根

千里ニュータウン、日本万国博覧会、そして世界都市吹田へ—市民の手による回顧展が大成功を収める—

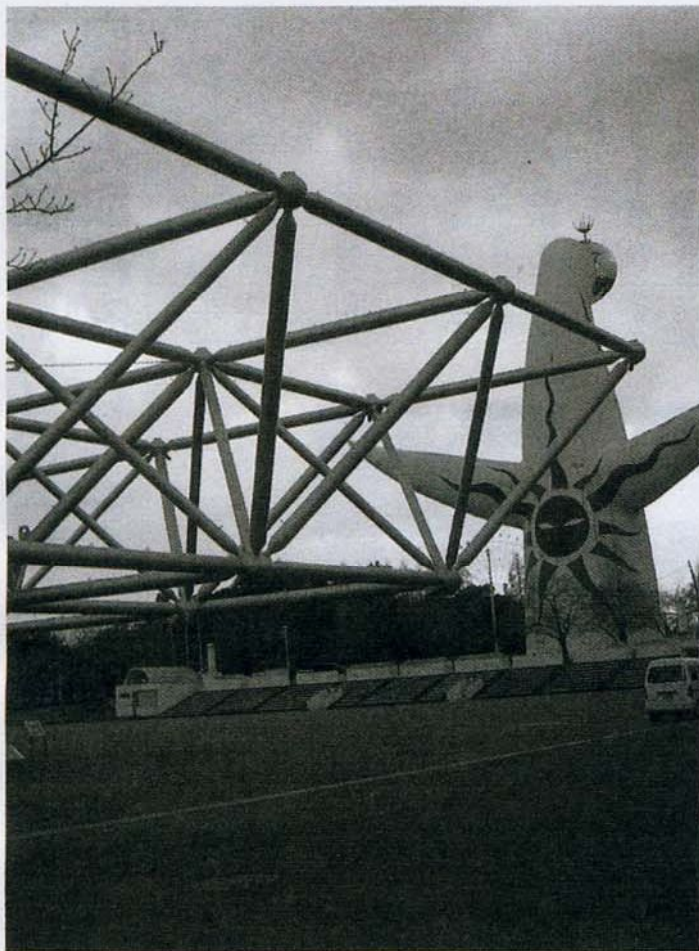


写真7 一部保存されている万博のお祭り広場の大屋根と太陽の塔

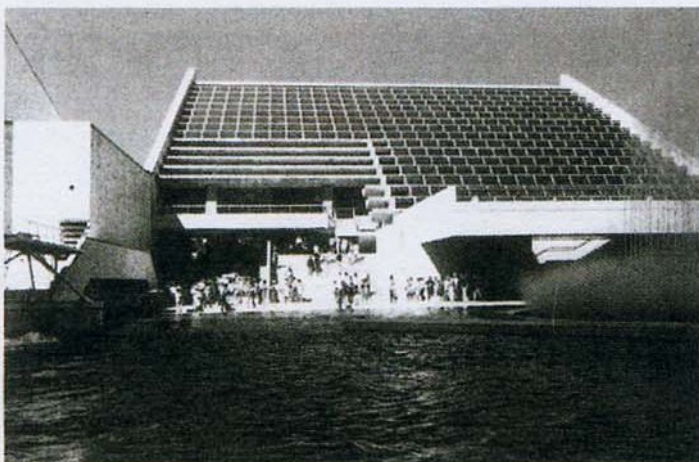


写真8 今はなき国立国際美術館—川崎清氏設計—(提供:保存実行委員会)

の設計・施工の苦心談を語ってもらった。写真7は一部保存されている大屋根である。京都大学名誉教授の川崎清氏は万博の基本施設設計に携わつてこられたので、大阪万博の計画の経緯とそれにかかわられた方々の系譜について講演してもらった。川崎先生の設計された万博美術館も今はなく、写真8がその全景である。また日本万博開催の発案者であり、生みの親であった国立民族学博物館元館長の梅棹忠夫氏について「万博を生み出した知とその技術」と題して、お弟子さん

である作家の中野不二男氏、前出の片寄秀俊氏、吹田市立博物館長の小山修三氏の三人により、梅棹忠夫氏の名著「知的生産の技術」を中心に、梅棹氏の回顧と氏のもとに集まった日本の頭脳といわれる人びとによる「万国博をかんがえる会」について語ってもらった。さらに作家の小松左京氏と国立民族学博物館名誉教授の石毛直道氏

には、当時を回顧しての対談をしてもらった。その後、日本万国博覧会記念機構の平田清氏により「万博記念公園の今と将来」、京都大学教授の夏原由博氏により「万博公園の自立した森づくりについて」と題して講演してもらい、万博公園の今後のあり方と自立林としての実験とその存在意義について述べられた。

最後の行事として、吹田市長と中国総領事 羅田廣氏によるフォーラム「市長・中国総領事を囲み熱く語ろう」を行い、そのなかで羅総領事は、2010年5月1日から10月31日まで中国上海で開催される万国博について述べられた。また羅氏は、上海万国博は吹田での日本万博を手本にしているとも言われた。吹田市は千里ニュータウンの造成と万博開催地として成功したことにより世界都市として広く知られるようになり、上海も吹田での万博の成功を手本としたいという発言があった。このようなことを広く日本中に、さらに世界に知らしめるために、市民が発想し、企画し、実現した二つの展覧会の成功は非常に意義あるものであったし、さらに今後のまちづくりにも大きく寄与していくことを確信する。